



自分に自分は見えない！

各事業所やフロアーに掲示

永 寿 会 通 信

黄色い飛行船 第16号

2016年 9月13日

先日、東京テレビの「何でも鑑定団」を何気なく見ていたら、画家の中原悌二郎や鶴見吾郎など親しかった、エロシエンコの肖像で有名な「画家中村彝」の作品として出された絵画に関して、出品者と鑑定人とのやり取りから、これは？なる考え方を学びましたので参考までに披露させていただきます。

エロシエンコはウクライナ人で盲目の童話作家、詩人、エスペランティストでした。ロシア革命に関連し、ボルシェビキとして疑われてインドから追放されて日本に来ていて、創作対象になったもので、中村彝の画の対象となったことにより名を残しています。

また、当時、中村彝は余り健康ではなく、この絵を創作するには精根尽き果てるまで集中して描き上げたそうで、友人たちが証言をしています。

その中からは、病弱や闘病中、障害が有ったりする関係性から、望む状態を見つめつつ生きてゆく画家の心意気感じられます。

私達の中では、日頃多くの方が自分の健康の大事さに気付かず、また、日常生活においても目一杯で、「ゆったりとした時間が取れない人が旅行に行きたいな」と思う気持ちの位置や、「元気な人や、余裕あふれた人が病弱や闘病中、障害者の心情を如何感じているか」は心許ないものと思います。

実現できている時は、それが当然と思い、その「有難み」、「貴重さ」はなかなか実感できないということです。

良く言われるのは、「若い時には元気と暇が有ってもお金がない」、「成年時代はお金と元気があっても暇がない」、「年老いるとお金と暇が有っても元気がない」となかなか三拍子がそろわないことが人生の教訓になっています。

福祉の最も真髄となる基本は、対象者の立ち位置や心情に思いを巡らせ、しっかりと深めていくことで形作られていきます。なかなか自分に自分の実像は見えません。

出来るだけ実像が見えるようにし、バーンアウトしたり、紆余曲折しないよう確実な歩みをしたいものです。

以 上